

### 3 実施の効果とその評価

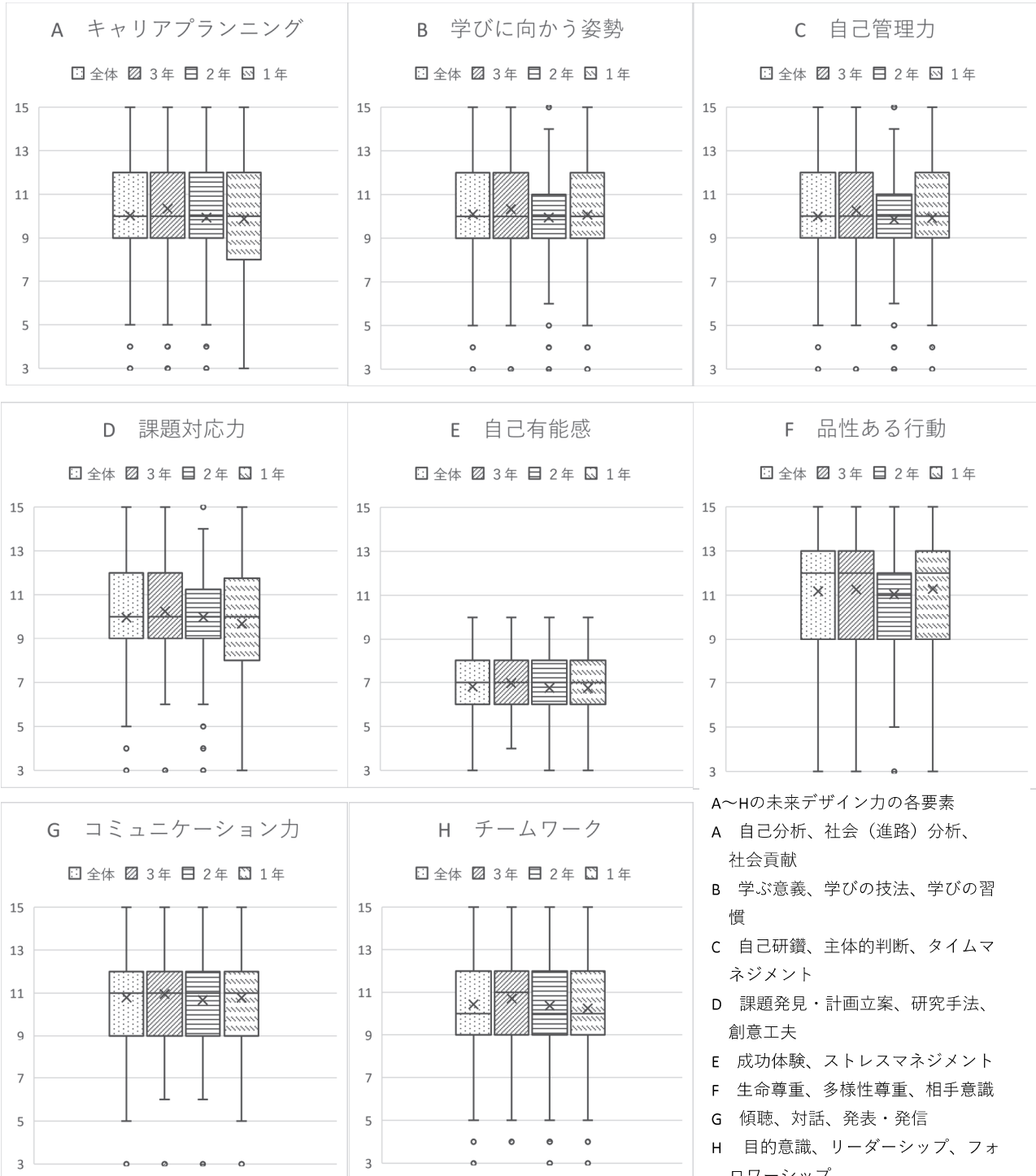
#### 1 生徒アンケートによる「未来デザイン力」8項目の到達レベル

R5年12月実施 n=583

未来デザイン力：SSH、教科授業を中心とする本校の全ての教育活動を通じて育成を目指す資質や能力

A～D社会に貢献する力、E～H自他を尊重する態度（力）

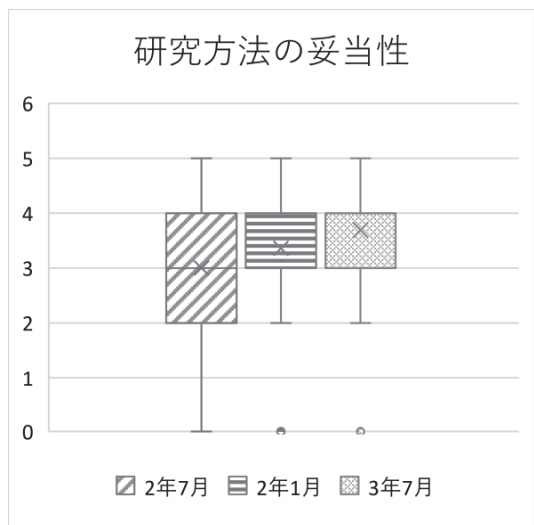
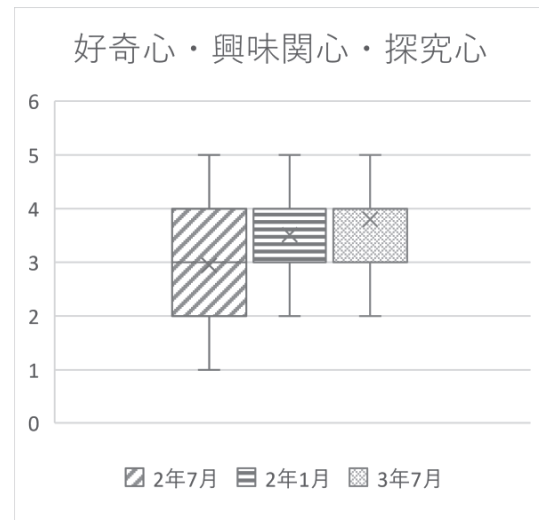
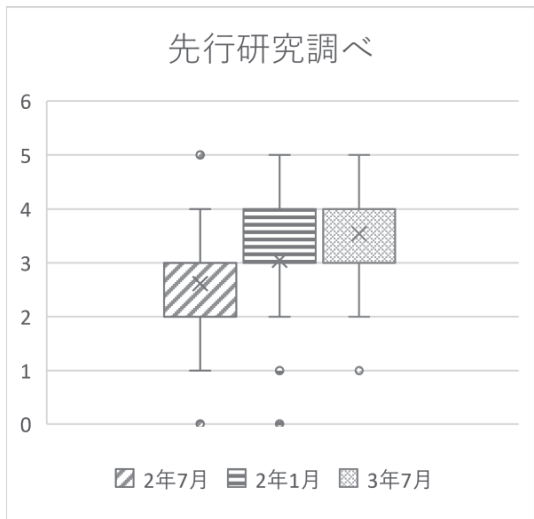
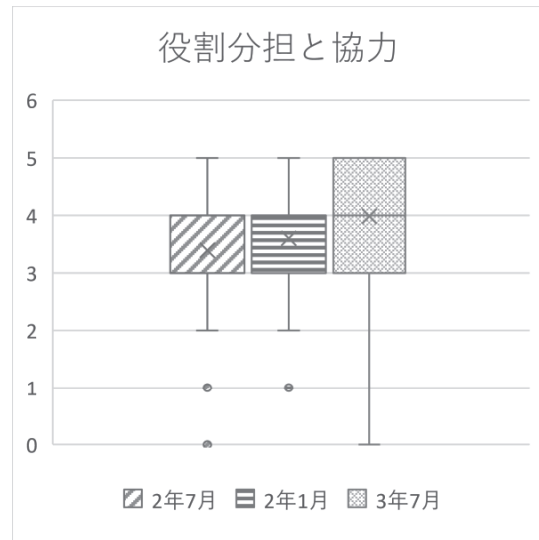
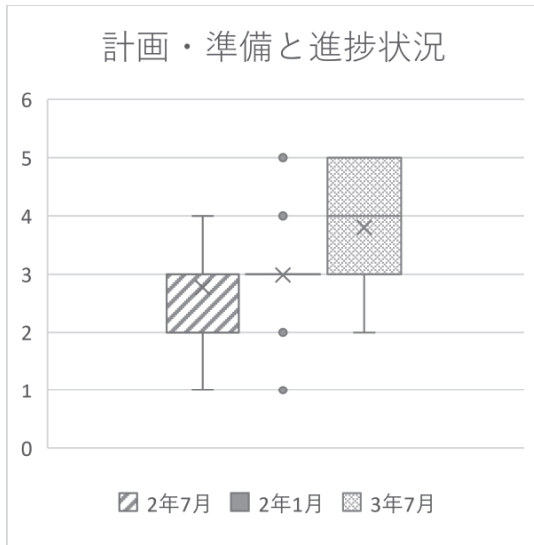
規順 Level 5【広げる】 Level4【自分のものとする】 Level3【実践する】 Level2【わかる】 Level1【知る】



進路意識が高まるAキャリアプランニング、SSH課題研究に特に関わりが深いD課題対応力において1・3年を比較すると、分散状況や平均値でやや違いが窺える。1年生の各評価が、上級生と大きな差がなく表れたことは、未来デザイン力の8つの柱を示し、新規の事業を含め実施してきた結果、生徒のそれに向かう意識も高まっていた効果として捉えられる一方で、評価の規準が3～4に収束しやすい可能性もあった。評価の指標を分かりやすい表現にして、今後の取組を精査いくことも必要である。

2 3年生（SSHトレーニング）課題研究活動ルーブリック評価の推移

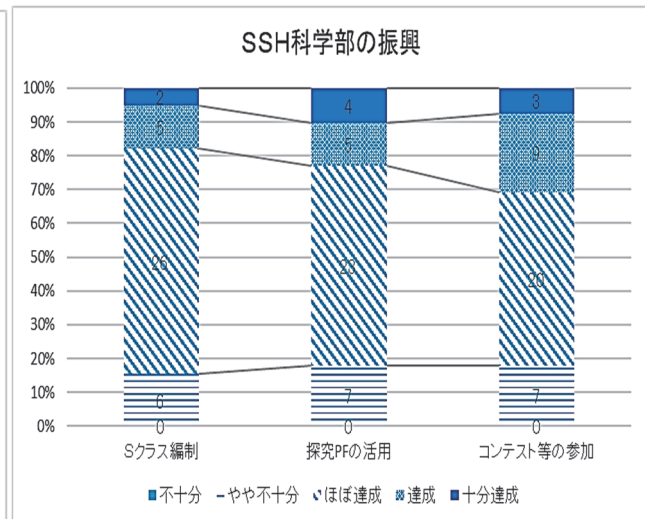
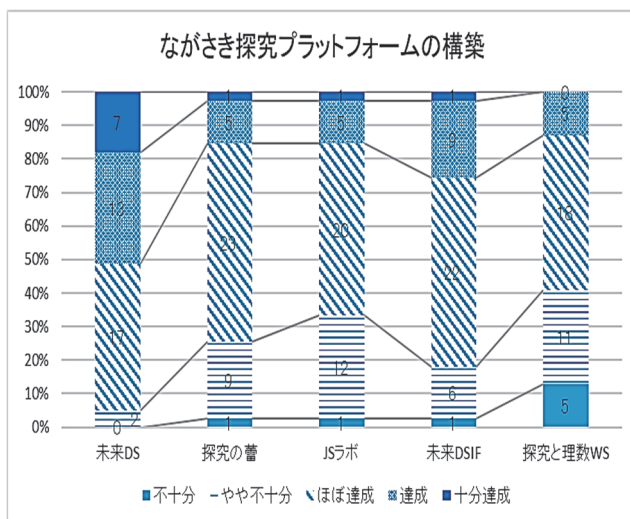
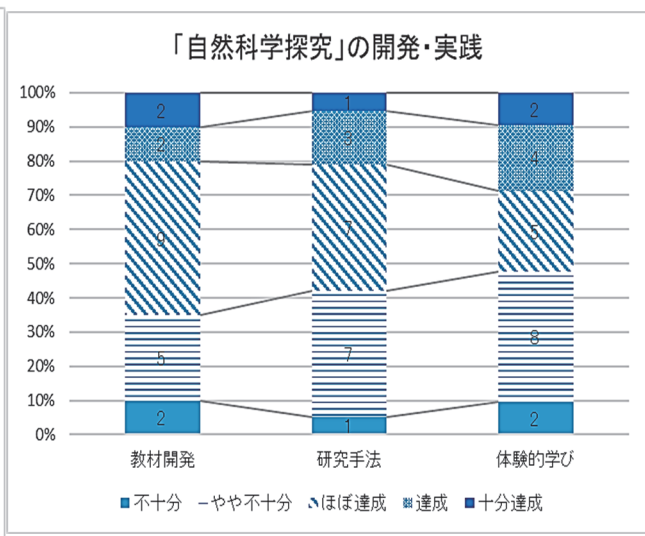
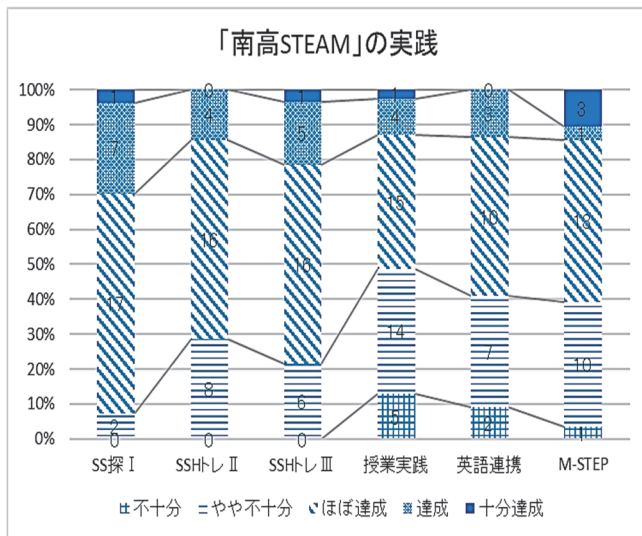
n=65班



2年→3年にかけての活動ルーブリックによる生徒評価では、全体として、上昇傾向が見られた。  
 特に、先行研究調べや研究方法の妥当性については、第Ⅱ期からの研究開発を通じて、担当教師の助言や外部指導者の支援による研究方法の改善、深化を図ってきたことの成果といえる。その結果興味関心、探究心の向上にも繋がる傾向が見られた。  
 一方、役割分担・協力については3年次に分散が広がった。主体的に取り組む意欲に差が生じ、積極的な研究活動が班内で一部の生徒に偏った班があった可能性がある。

3 SSH事業アンケート（教員） R5.12実施 n=39

3-1 SSH第Ⅲ期各事業取組について



『南高STEAM』の実践について、新規の企画を多く設けたSS探究Iについては、教員の評価が比較的高い割合で良い評価が得られた。一方で、教科横断型・思考学習型授業の実践についての達成度はまだ不十分との評価が多い。今後の全職員による目的・目標の共有と、全校をあげての取組体制の明確な構築が課題である。

『ながさき探究プラットフォーム』構築については、未来デザインスクール等多くの教員が関与する事業については認識が高く良い評価が多い。探究の蕾、ジュニアサイエンスラボ、未来デザインイノベーションフェアなど、対象生徒が一部や外部であるなど、取組の状況が校内の職員に分りにくい企画については、今後校内での周知や実践報告の機会等を設け、取組の共有を図る必要がある。

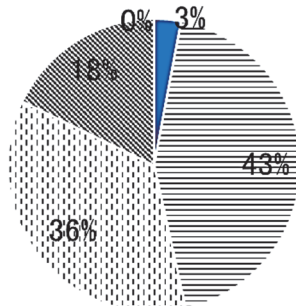
『SSH科学部』の振興については、校内での活動状況の周知が多くもたれており、職員の認識や成果の共有が図られた成果により、概ね高い評価が得られた。

3-2 課題研究指導について

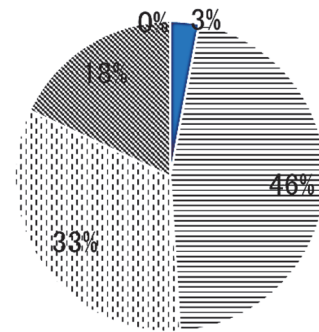
R5.12 実施 n=39

5 5 と思う 4 やや5 と思う 3 どちらでもない 2 あまり5 と思う 1 全く5 と思う

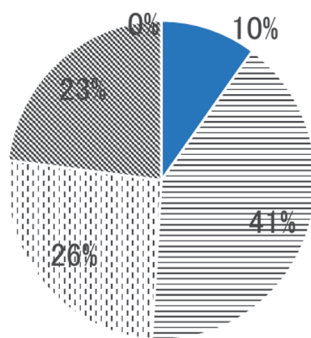
1 リサーチクエスチョンや仮説・研究計画書について、生徒への指導やディスカッションができる



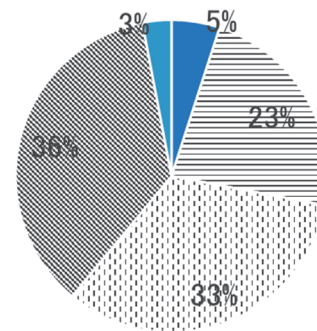
2 研究の進め方や改善について指導ができる



5 課題研究など、探究的学びの指導に活かせる知識が増えた

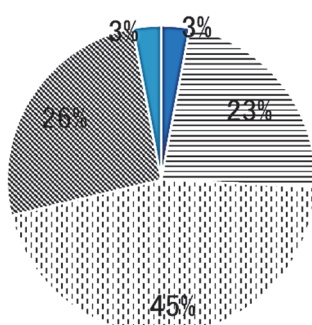


6 より深みのある課題研究にさせるために、生徒と外部専門家との接続ができる

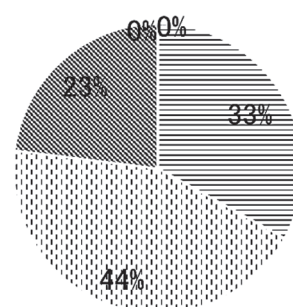


課題研究指導は、半数近くが肯定的な評価（5，4）であった。本校での勤務年数が長い教員ほどその傾向が表れており、SSH指定前期からの蓄積は、かなり進んできたといえる。赴任1、2年目の教員への指導ノウハウの継承が効果的に行われるよう継続した協力体制づくりに努める必要がある。『Q6 生徒と外部専門家との接続』は、肯定的評価28%と低い。生徒の課題研究内容や進路希望状況に合わせて、多様な機関との支援体制を確立していかなければならない。

8 自分の教科授業において、s探・Sトレに関連する内容との往還、発展的な実践ができる



9 自分の教科授業で、「南高STEAM」に沿った授業（教科横断型、思考学習型、学習到達度を意識した授業）の実践ができる。



『Q8 教科の授業と課題研究との往還を図る「南高STEAM」の取組』については、肯定的評価は26%、『Q9 自身の教科授業への実践』は33%と、まだ十分な成果とはいえない。1年目の取組を取り掛かりとして、次年度に向けて更なる推進を図らなければならない。